

「七夕」について

—「七夕」伝承の受容と変容の諸相—

金 亨 哲

「七夕」歌について、「七夕」伝承の大陸からの受容がいかなるものであり、その結果としてどのように変容したかを、時代とともに韓国の七夕と比較してみる。

目 次

- 1、七夕説話
- 2、七夕行事
- 3、韓国の七夕行事
- 4、渡来人と七夕

1、七夕説話

日本の七夕説話については、古来中国伝承の説話と考えられているが、折口信夫氏の『古代研究、民俗学篇』の中に収められた「水の女」は、漢風習合以前の古代日本のたなばたつめの姿と、元来はゆきあい祭りであったとする七夕祭りについての独創的な見解を披瀝された。それ以来、ことに昨今では、七夕伝承については、相変わらず中国伝承説と、折口氏の示唆から出た日本先在説とが交差している。七夕伝承が一応、中国伝来のものと考えられるから、その説話の形を中国に求めて見ることにする。宋代の詩人、張文潜の「七夕歌」は「淮南子」「述異記」などの影響の下に成った詩で、中国における七夕説話の安定した形をみることができる。

人間一葉梧桐飄 尊收行秋回斗杓
神宮召集役靈鵲 直渡銀河橫作橋

河東美人天帝子 機杼年々勞玉指
織成雲霧紫綃衣 辛苦無歡容不理
帝憐獨居無與娛 河西嫁与牽牛夫
自從嫁後廢織紵 綠鬢雲鬟朝暮梳
貧歎不歸天帝怒 責婦却踏來時路
但令一歲一相見 七月七日橋邊渡
別多會少知奈何 却憶從前歡愛多
勿々万事說不尽 玉龜已駕隨義和
河邊靈官催曉發 令嚴不肯輕離別
便將淚作雨滂沱 淚痕有盡愁無歇

この詩に見えるところでは、織女は天帝の子である。これはすでに「史記」天官書に見える。この説話において、織女と牽牛は初めから一年に一度の逢瀬を定められていたということにはなっていない。これは永遠に許されることのない懲罰の結果なのである。古来、罰せられた天女の話はいくらかもある。竹取のかぐや姫のごとく、人界に降らなかつただけのことである。七夕説話が後代まで長く語り伝えられた一因は、夫婦の星が年に一度の逢瀬を許されるという儚い契りの由来が懲罰の結果であるとする一種の哀惜の情を人々に懐かしめるからである。織女は一旦は牽牛に嫁し、天帝の怒りに触れて一人河東へ帰るのである。そして一年に一度、七月七日、銀河にかけられた鵲の渡す橋を渡って河西の牽牛に逢うことを許される。梁代に至れば「文選」があって、その中には「古詩十九首」がある。

迢迢牽牛星 皎皎河漢女
纖纖擢素手 札札弄機杼

終日不成章 泣涕零如雨
河漢清且淺 相去復幾許
盈盈一水間 脈脈不得語

この詩の場合も、張文潜の場合とともに織女の側に同情しての作品であって、牽牛の気持ちには触れていない。

同じく『文選』雜詩下に謝惠連の「七月七日夜許牛女」がある。

——— 瞬目鸞曾穹
雲漢有靈匹 弥年闕相從
遐川阻昵愛 脩渚曠清容
弄杼不成藻 聳轡驚前蹤
昔離秋已兩 今聚夕無雙
傾河易迴幹 款情離久悵
沃若靈駕旋 寂寥雲幄空
留情顧華寢 遙心遂弄電
沈吟為爾感 情深意弥重

この詩の場合、織女は馬を駆って牽牛の許に赴くことになっている。ただし、これには別に説もあるらしく、織女は竜駕を操って往復するとも解されているようである。これは鵲の渡せる橋という通説とはかなり違ってくる。この鵲の橋ということは、「淮南子」に、「鳥鵲填河成橋。度織女以会牽牛。」という語があったという。しかし、いずれにせよ織女の渡河は七月七日の夜の上に許されたことであった。

以上のように、古代中国においては織女の境遇に重点を置き、牽牛についてはほとんど触れることがない。

(「古代文学の伝統、七夕説話伝承考、大久間喜一郎」)

さて、牽牛織女聚会のことが明瞭に記されているのは晋の宗懐の著という「荊楚歲時記」、梁の呉均の編という「統齊諧記」、さらに「文選」洛神賦の李善注などの記事であるが、この聚会をいかなる意味に解するかについては説がある。それをみると、第一の説は、牽牛と織女

とが相思慕するというのは天体相互間に作用する引力の関係を説話化したもの、と解するもので、新城氏はその著書のうちに「星と星との相互の間には常に強大なる引力が作用しているので、これがために永久離れざる恒久的集団を形成しているものである。」と論じ、さらに「畢竟物質密集の大勢は宇宙生成の根源であり、現在成立の根底である。牽牛織女の両星をして天の河を渡りて相聚会せしめんとする七夕の古伝説は、正しくこの天地宇宙の根本原理を象徴せるものと解釈すべきであろうと思う」と述べられている(「宇宙大観、新城博士、27-28項」)。

第二の説は、DE GROOT 氏がその名著 LES -EFTES ANNUELLMENT CELEBRES A EMOUI に述べておられるところであって、その要旨を摘記すれば「その内に織女を含む LYRA 座は冬の初めに真夜中天頂に輝くが、冬は婦人がもっぱら屋内で家庭的仕事に従う時で、その仕事の最も重要なものは織ことであるから、かかる時期のはじめを示すこの星を織女と称するに至った。然るに、かかる時期は今を去る1万8千年頃、冬至の時期と関係づけられたが、その冬至は支那人のいわゆる陰陽の場合、情の時であるから、織女と天河を挟んで対している男性に見立てられた牽牛が結合するという説話が發達し、それが後世、歳差の関係で7月の初めに起こるといわれるに至ったのである」というのであった。

第三の説は、牽牛は農時の基準としても觀察されるものなるが故に、農業民族たる上代漢民族の注意を怠らなかつたところで、農を表徴し且つ、その名も易などに現れる如く「乾為天——為馬」に対し、「坤為地——為牛」とあって、農の基本たる地と関係があり、明らかに農の SYMBOL であるとともに織女は織なることが蠶桑と密接な関係を有する以上、必ずや桑を SYMBOLIZE したものであって、この牽牛織女聚会説話はかの源を周制に發したといわ

れ、漢代あたりから盛んとなった天子の籍田、皇后の蠶桑を重要視する、いわゆる農桑思想が識者に尊重されるに至って作為されたものであろうとの説（「白鳥博士」）である。

第四の説は、山本一清氏が「天文と人生」六、星学上より観たる七夕説話「174-178 項」に両星聚会の意味を次のように説いておられる。

「併し、此伝説そのまま実際の星に当嵌めてそこに何等かの意味を見出すことはできないであろうか。一体新星という一種の星は昔から正確な記録の上に載っているだけでもなお四十個以上も発見されているがその発見の場所はおおむね銀河の中か若しくはその付近である。

そして一旦出現した新星は日を追って光力が衰え、最初の青光が白となり、黄となり、ついにみえなくなるという風にその色が種々に変わり行く特性を有している。七夕の伝説は思うにこの新星の出現ということにその起因源をついでいるのではあるまいか。遠い昔のある時代に牽牛織女二星の中間の辺、銀河の中程に著しい一新星が現れたことがあるとして、その美しい光が青白赤と漸次五色に輝き変わるのを見て非常に不思議に考えた所から優しい天上の恋物語が生まれて来たのではなるまいか」と述べられている。

第五の説は、出石誠彦氏（「支那神話伝説の研究、牽牛織女説話の考察」）が述べられているつぎのような説である。「私はこの説の由来を、今日から何時の頃と明確に言うことのできない程の古い時代に源を発する、星の実際上の観察に基づいた民間説話であると考え。かの牽牛星が農業生活を主とした上代漢民族の間で如何に注意されたものかは言うまでもないが、ここに説くまでもない明白な事実であるから、この星に注意が払われた以上、これと相対して天の側の彼方に輝いている織女もまた当然観察されたに相違ないということは容易に想像することができる。そしてそのように観察されたなら

ば、その間にこの二星が一年の中で比較的隔たって見える時期があるとともに、漸次天の川を挟んで牽牛織女星が著しく接近するように見える時期がある事実も知られたに相違ないし、且つその接近する時期がほぼ7月の初めであったのもこの説話を解釈するに当たって見過ごし難いことであろう。なお、民間の知識に当たってはそのような事実が直ちに男女相思の説話に転化されたのであろう。さらに、そう転化することによってこのような説が一般に普及し、且つ勢力を得るに至るのは、蓋当然のことと考えられるから、私はこの説話の原形はこのようにして漸次形を整えていったものと信ずる。」

第六の説は、中西進氏（「年中行事の文芸学、万葉集」）の説である。「七夕といて、七月七日の夜に星祭りをする行事は、そもそも中国に始まる。古くから中国では、天の川を隔てた牽牛と織女との二つの星が年に一度七月七日の夜に逢うことを許され、織女が川を渡って牽牛を訪れるのだと、語り伝えてきた。この夜にあたって、二星を祭るのが七夕の行事である。この伝説、すなわち川を隔ててあいう男女が年に一度出会うという伝説は、実際に漢水（揚子江の支流の1つ）のほとりで行われた習俗に基づくと思われている。古代中国では男女が川を渡って逢う習俗があったらしく、それを天上に投影し、星の物語としたものが牽牛、織女の物語だと考えられるのである。中国最古の書物「詩経」には、この漢水のほとりに歌われた男女交歓の民謡をつぎのように載せている。

南のかた南山には、高くそびえる木がある。
だのに、おもむいて求愛することはできない。
漢水の広広と流れることよ。泳ぎ渡ることはできない。

揚子江の悠然と流れることよ、船を出して渡
ることはできない。

もちろんこの民謡は七夕伝説のものではない。実際に漢水地方で歌われた恋歌だが、しか

し、のちのち、二つの星が逢い難いことを嘆く詩歌の、その原形はすでにできあがっているかに思われる。それほどに、この伝説は星の物語といいながら、生活的な具体性をもったものであった。これは地上の生活を天上に投影し、逢い難い二星の悲恋物語を構成するに至ったのである」と述べている。すなわち、地上の漢水を隔てて男女相思相思慕するという現実の物語があって、それが星に基づいた説話と結びつき一層その結成を促進したものということである。

以上のことをみると、中国においては、占星術、天文学の発達が著しいことはよく知られている。今の占いにしても星と関連づける占いがあるほどである。このような学問が発達していく過程で星の物語が出てもおかしくない、自然なことであると思われる。七夕の伝説は漢水のほとりの男女の語らいが天上の星へと移行されたものではなく、農耕社会を反映した二星の名より天上の伝説が生まれ、それが地上にもたらされたと思われる。この物語をおもしろくするために、これと似た天人女房、羽衣物語などができた可能性はあると思う。

2、七夕行事

1年間を1月から6月までと、7月から12月までとの半年ずつ2つに分け、この2つの半年の期間が年中行事の構成上相似た性格を有し、相対応した行事的位相を持つことが民俗学によって立証された。半年周期説とでも称すべき考え方である。例えば、前半期初頭の正月の行事と後半期初頭の七夕、お盆を中心とする7月の行事とが、行事的性格とその構成において相通するという興味深い事柄が見られる。この成果は民俗行事において得られたものであるが、同様に宮廷儀礼においても得られる事柄であると思う。

7月の祈雨霽雨行事の基礎には、水の神祭りの古俗が存した。この月は水の神祭りの時であった。それは稲作に関係する意味においてである。相撲はその本縁からして水との関係が深かった。それも稲作を媒介にしての関係であった。さらに相撲には田遊びの要素が見られ、七月七日節に相撲が行われる根拠も田の鎮魂舞踏的性格のゆえにあったと考えられた。そうした意味から七月七日節の基底には、水の神祭りの性格が想定され、その祭りは稲作とは無縁のものでなかったと考えられる。

7月は半年周期の後半部の最初の月にあたる。前半部の正月に相当する時であり、それは春祭りの要素を有する時期であった。換言すれば直会的性格を特色とする時期であり、そこに七月七日節の宴会的基盤を存した。さらに春祭りの特徴として予祝性があり、同時に競技性を有するもので、そこに相撲の展開する行事基盤が考えられた。七日節が7月の当初部分に位置するということは、六月祓の影響をうけるだけでなく、陰陽道の朔日の祓などとの混淆から、禊祓の時としての性格を有するに至った。水に関する祭事としての要素を深めた原因にもたった、さらに正月に異郷よりの訪問者を迎えるごとく、この後半期の正月にも異郷の神を迎えた、神の来臨する時期だったのである。水をわたってはるばる来臨する神があった。この期にはその一部が伝説に流用されたままであった。

七月七日節は半年周期後半部の冒頭に位する、正月に匹敵する位相を有する時期で、いわば春祭りに相当する性格を有する時期である。そこに、祭りの時としての性格がみられる。一方、年間を通して考えると、一連の稲作期に位置する、その中でも出穂を迎える時に当たり、特に時宜に適した雨量と日射とを要する重要な時期であると言える。これはまた水を支配する力のもっとも必要な時期であると言える。相撲がこの期に行われたのも、そうした古代人の水

支配に対する切実な懇望が背景をなしていた。どういう形で水の神を祭り、その力に頼らねばならぬ時期であった、水の神の祭りの時だったのである。

この節日には3月3日、5月5日と同類の行事的性格が付与されている。それらと同様、「禊祓の時」としての性格が考えられる。六月祓との関係からその性格は他の節日に比較して特に強調されたといえる。民間行事をも含めて考察するとき、この節日に水との関係が濃厚にみられるのは、やはり稲作との関連が存したのである。

皇極天皇の南淵の河上に行われた祈雨には、日本のこの時期に行われた水の神祭りの古姿が暗示された。四方を拝し、天を仰いで祈る方式にはたしかに元旦の四方拝に共通する姿が見出される。これが八月朔日のいわば旬事の祭りとして行われたことを考えると、あながち公事根源の四方拝起源説も根拠のないものともいえない。桓武天皇の潔斎後、早朝の庭上における祈雨の模様など考え合わせると、四方拝、御燈など一連の行事に根底的に共通する要素を、祈雨行事にも発見できるように思う。それらの行事様式の中に大陸渡来の行事要素が混在していることは事実である。しかし、それらを成立させる根底に在来儀礼の姿が存したことは考えられる。

それら一連のいわば祈願行事の基礎をなす来祭事儀礼の上に、乞巧奠の星祭りの形も受け入れられたものであろう。これは形式上の問題であるが、内容的にはその母体をなすものは水の神の祭りであったとみられる。折口氏のお考えによると、中国渡来の織女伝説の在来基盤として、水辺に設けた棚機に神衣を折り、水をわたって来る神を待ち受ける「たなばたつめ」の古俗があったと説かれる。日本の水の神祭りの水平理論が、垂直理論に転換された時に、大陸渡来の星祭りは可能になる。

しかし、この理論転換は決して不可思議のことではない。海上はるかの常世国が、天上の高

天原へと発展を遂げるのと同類の転換である。祈雨行事においては名山高峰の神に祈雨が行われたし、水の神も高山の水分に座すと考えられた。さらに皇極・桓武両帝は天を仰いで降雨を祈られ、こうした雨乞行事を考慮にいと、垂直理論への転換はごく自然なものになろう。このように7日の乞巧奠の基盤には、同じ時期の水の神祭りの古俗を考えることができる。

(「饗宴の研究、文学編」、倉林正次)

七夕行事の基盤から離れ、天上の恋を地上に移して、男女相聞の歌として展開した王朝の七夕歌は、儀礼歌の範囲を脱出して別途の進展を見せたと言えるが、実は行事意識の内在化という形での、新しい儀礼歌の誕生を意味していると考えられるのではあるまいか。二星の逢会を中心とする、いわば七夕モチーフは、行事としての外形とはべつに王朝人の心の中に意識的形成を遂げていた。そこに七夕儀礼の内在化がみられると思う。こうすることによって、七夕儀礼は王朝人の生活と一体化し、真の意味での日本の七夕行事となることができたとも言えよう。七夕儀礼は平安時代に入り、行事的展開を遂げる一方、日本の祖先たちの精神生活の中に内在化することによって、生活化の道をたどっていったのである。そこに行事と生活と文学との融合一体化の世界が展開されているといえるのではあるまいか。

(「饗宴の研究、文学編、七夕歌とその儀礼的背景」、倉林正次)

嵯峨天皇の御代になると、七日節は一層盛んに行われ、例年にわたってその記載が見られる。嵯峨朝の七月七日の史料は3つの種類に分類することができる。

- A 幸福泉苑、観相撰、命文人、賦七夕詩。
- B 幸福泉苑、観相撰。
- C 幸福泉苑、命文人、賦七夕詩。

A類は弘仁3、4両年に見られるもので、平安朝の先蹤を継承した形であり、その最初の例は天平6年に見られた。相撲御覧一七夕の詩宴という二段構えの行事次第からなっている。つまり複式構成をもって成り立っているのである。天平10年の場合も後段の詩宴の内容が梅花追懷の時季はずれのものになっていたが、やはりこの種類に属するものであろう。

B類は最も実施度が高い。桓武朝の場合も場所は馬フ殿、朝堂院と変わっているが、この形に属するものである。延暦期の形式を受け継いだものだともいえよう。形のうえからはA類の前段だけを残したものだともいえるのだが、これにたいして、その後段だけの形のものがC類である。6年の1例だけである。

しかし、以上の3種の形に該当しない場合がある。持統天皇5年、孝謙天皇の天平正勝3年などの例である。天皇の出御を得て公卿以下群臣に宴を賜うという場合であり、仮にD、天皇御某殿、賜宴公卿朝臣、といった形を考えてみることができよう。これは公宴の最も基本的な形である。持統、孝謙両朝の七月七日の記載には、この日の節会としての基礎的な姿が窺知される。元明天皇和銅3年の場合は嘉瓜献上の儀を認めれば、この節会の一般的形の上に七月七日の節の特徴を加え、奏賀の形を強調したものと考えることができ、やはりこのD類に属すると見られよう。

このように嵯峨朝に至る間には、七月七日節の記載の形に4種類が発見される。この4種類の形の中で時代的に古いものは、持統5年類を含むD類である。七日節の公宴としての基礎的姿を示すものである。時代的に古いというだけでなく、この形は七日節の最も原初的に基本的姿を物語るものである。七月七日の節会としての基礎をここにはっきり見ることができるとともに、この日の行事が宮廷儀礼として、節会の性格を基盤において出発したものであること

を知ることができる。これにたいして4類の中で一番新しい形はどれであろうか、宮廷儀礼史の発達における弘仁期の位置を考えると、一番新しいということは同時に、七月七日節の成立した姿ということの意味する。そこに七日節の儀礼的に到達した形態を見るわけである。それは弘仁後期、7年、11年に催された神泉苑に行幸して、相撲御覧だけを行ったB類である。

(「饗宴の研究、文学編、七月七日節」 倉林正次)

3、韓国の七夕行事

つぎは韓国での七夕伝説について見ることにする。韓国の忠清北道では「七夕の日」の音が「七星の日」と相似ているから、「七夕」を普通「七星」と呼ぶようになった。

(「韓国民俗総合調査報告書、忠清北道編」)

七月七日は牽牛、織女が逢う日という。このために七月七日に近くなると、鳥たちは銀河水に橋を造りにいくので見えなくなったりして七夕が過ぎたら頭がはげるといふ。達城、義城、迎日、金陵、英陽、榮州、醴泉などの地域では上帝の孫娘と牧童である牽牛が婚姻したから、上帝の怒りで東西に別れさせ、1年に1度鳥が鳥鵲橋を造って逢う。この時の別れの涙が河になったという。月城、水川、慶山、清道、金陵、尚州などではきびの餅のおばあさんとわらじのあきんどのおじいさんが逢うという。また、義城、安東、青松、迎日、永川、高靈などでは新妻の星、わらじの星が逢う日であり、鳥が橋を造るために頭がはげるといふ。

金陵地方ではこの日、昼に雨が降れば嬉しい涙、夕方に雨が降れば別れの涙といい、月の夜に糸を通すと縫うことが上手になるという。達城では雨が降れば豊年になるといい、この日には百種の食べ物を準備して女たちが星祭をしたというが、いまは行われていないし、義城では女たちが針に糸を通し、主人の裾にそっと通し

ておいたら何でも願いがかなうといい、高霊では空にある新妻の星が同じ所に集まる意味で宇宙を左右する天体を崇拜するようになったといい、尚州では暗い間に糸を通した針を試験を受けにくい人が分からないようにその人の袖に通したら合格すると信じていた。達城、慶山、清道では子供たちが川で体を洗ったらわざわいを避けるといい、迎日、清道、月城では薬になる泉の出る場所に行ってその泉を飲んだら重病を治すといい、金陵、尚州、聞慶では農事の仕事を終えてふくしを洗う日という。

(「韓国民俗総合調査報告書、慶尚北道編、文化公報部文化財管理局」)

行事と風俗としては、七夕礼「七夕に祖先に礼をする、高敞、秦仁」、SULMEGI「七夕に農夫たちがSULMEGIの試合をする。全州、鎮安」、針孔「七夕に女たちが縫うことが上手になるように星に拝む。全州、茂朱」、女たちが七夕に糸を通す試合をする鎮安、田を耕す試合「七夕に農夫たちは田を耕す試合をする。鎮安」、SIAMJE「泉をきれいにしてSIAMJEをする。この日に餅も作る。群山」、GOULGE「宮中でおこなわれた行事。全州」、松の火の遊び、お寺に行って拝むことなどがある。

(「韓国民俗総合調査報告書」、全羅北道編、文化公報部文化財管理局)

達城、安東、迎日ではこの日にわざわいと病を防ぐための祈願をする。尚州では七星壇に胡麻油で火をつけ、子孫たちの長寿と福を拝む。安東では懐かしい客を待ち、慶山では別れた夫婦を慰め、牽牛、織女の星を見ながら歌い、高霊、奉化では死んだ人の靈魂を慰める。月城では薬になる水を飲み、机の上にご飯と果物などをおいて父母の冥福を拝み、所によっては海の水で体を洗う。月城、清道、聞慶、漆谷、尚州では衣とか本などを干す風習があり、奉化、醴泉、安東などでは瓜、西瓜などで祖先に祭祀をする。善山、月城では星を見て、その年の農事

を占い、金泉、月城では死んだ父母兄弟の靈魂を慰める。そのほかの娯楽としては相撲、詩を詠み、縄づくり、農薬大会などがある。

(「韓国民俗総合調査報告書、慶尚北道編」、文化公報部文化財管理局)

星を信仰の対象としてすべての願いを拝むことはこの日におこなわれているが、仏教ではこのような民間伝来の七星信仰をすばやく吸収して仏教の土着化に適用した。だから七星は神から仏に昇格するようになり、星1つ1つに何々如来仏という名前をもつようになった。致誠光如来は済州島では「七星」というが、これにも「AN七星」と「BAT七星」がある。AN七星は庫房「米を入れる部屋」の中に置き、BAT七星は家の裏の庭に置く。毎年一度ずつ米を入れ替えて祈願すれば豊年になり、富を呼ぶと信じた。陸地の「TOZU」「SEZUNDANGI」などのような信仰である。

(「韓国民俗大辞典」、韓国民俗辞典編纂委員会)

七星は南斗七星と北斗七星があるが、南斗は生を治める「南斗司生」し、北斗は死を治める「北斗司死」から北斗七星に致祭するのである。七星は人の寿命をはじめ人事万般の靈力をもったから、七星に致誠すれば願いが叶うと信じた。主婦たちが家の中に七星壇を作ったり、山とか川に人に分からないようにそっと七星壇を作ったりする。七星壇は石を七星の格好でつくって神壇とする、祭をあげるとか致誠をする3日前から禁忌をして不浄にならないように門や神壇のまわりに縄を張ることもある。特に重病の快癒、得子、子孫の登科のためには百日致誠をする。これは仏教でいう百日祈祷である。このほかに曙衣、曙書「晒書」などがある。

(「民俗誌」、文化公報担当官室)

つぎは韓国の巫歌に七夕の神話が見えるので巫歌について見ることにする。まず巫歌といえば韓国語ではGUTというので、そのGUTは

一体どういうものなのかについて見ることにする。伝統的な韓国の社会および文化は、大まかにいって男性を中心とした儒教文化と、女性を中心とした巫俗「シャマニズム」的文化の二重組織において理解される。その最も代表的な例としては、家の祭り、村祭り、年中行事などが挙げられる。韓国の家の祭りは男性を中心とした儒教的形式の祖先の祭りである「祭祀」と、主婦を中心とした、往々にして職業的シャマンによって執り行われる家神の祭りである「GUT」の2つのタイプの祭りがあって、両者は互いに相補いながら韓国の家の祭りの二重組織を形成しているのである。

（「朝鮮民俗文化の研究」、依田 千百子）

儒教的祭りである祭祀とシャマニズム的祭りであるGUTとの関係についてみれば、

A 祭祀は家のレベルから小親族内の範囲において結束する機能があるが、GUTは家のレベルで行われていて、祭祀よりも小規模のレベルの家の信仰となっている。

B 祭祀は形式的原理として男性だけの儀礼である。GUTは女性が中心になっているが、男性の儀礼参加を積極的に受け入れている。シャマニズムは男女平等の原理をもっているが、儒教の原理が中心になっている祭祀は女性を排除している。

C 祭祀は血縁の祖先のみ重要視するが、シャマニズムにはいろいろな神々の役割を重視する観念が見られる。つまり祭祀は血縁中心の家の継承観念が強調されている。これはGUTの中でもよく現れることであり、2つの種類の祭りによって観念化されている。しかしシャマニズムにおいては神々の役割も分化されているという観念が見られる。

D 祖先祭祀とGUTは相互依存的関係にある。祭祀における人間の義務は、神の役割、つまり福を与えるか禍を与えるかなどの効果を問わず、絶対的に血縁の祖先として祭ることであ

り、定期的に行われる。一方GUTの場合は、病気になったり、あるいは秋の収穫などの効果いかなによって行われることが普通であり、神と人間との関係はGUTのほうがより相互依存的である。

E 祭祀は、一般人である子孫の男性が祭るが、GUTは専門儀礼者であるシャマンを通して間接的に祭る。しかしシャマンが神となり、シャマンを通して直接的である。

F 祭祀は静粛にして神聖を守り、家族や親族以内に閉鎖される傾向があるが、GUTは速くて激しい音楽とともに賑やかに行われ祝祭的であり、親族の他に村人の参加も許され、開放的である。

以上が祭祀とGUTの関係であるがこの2つは相互補完的關係にあることが分かる。

（「韓国の祭りと巫俗」、崔 吉城）

GUTは大監ノリ、オギプリ、成主マジなどと呼ばれ、神霊をマジ「招致」してノリ「娯遊」させて神の怒りや人間の災厄をプリ「溶解」する宗教儀式である。この時、巫歌は祭物、舞踊とともに神の招致、娯遊、溶解ともっとも基本的で、核心的役割をする呪力を持つ。舞楽で司祭者がECSTASY状態に入ると巫歌は神の言葉「ゴンス」で表される。例えば成主プリをする時、プリは巫歌を意味しており、巫儀の意味もち、これらは多くの未分化性を含んでいる。すでにHARRISON 女史はギリシアのDROMENOはDRAMAと同意語であり、芸術と祭儀は実は近親性を持っていると指摘したが、ここのプリはそのままに「日本古俗の神霊招致の儀礼及びそれに関する歌」を意味していることも指摘している。現在も沖縄では豊年祭、稲刈祭をプリといい、日本の各地方の方言で神の歌をフーリというといわれる。

一方、日本神道古来の「祝詞」もノリコト「宣言」の略語といわれており、「祝詞」は本来は「祝」「ノリ DROMENON」と「詞」「コトバ、

言葉、歌詞 LEGOMENON」の複合で形成された名詞であるという立場から追究する必要があるようである。韓国の巫儀や巫歌を意味する成主プリ、クッノリなどプーリとノリという言葉がそのまま日本神道に残っており、主要な役割をしている点は、これらは他文化圏にも共通するという説明よりは、両者の近親性を説明するのによい資料になる。

巫歌には一般巫歌と叙事巫歌があるが、口碑文学においてはとくに叙事巫歌が重要な位置を占めるために、それを除いたすべての巫歌を便宜上、一般巫歌といった。叙事巫歌は巫歌にある説話モチーフが挿入されて叙事性を持つ巫歌を示す言葉である。現在、韓国の叙事巫歌はその性格から見て、堂神本解、神上神本解、一般神本解の3種類に区分される。本解は「本」と「プリ」の複合名詞で、神の「根本」「来歴」「歴史」などを「解釈」「説明」する巫歌である。プリには怒りが解ける、氷が解ける、罪人が釈放される「解放」「溶解」「和悦」などの意味もあろう。済州島の諺に「鬼神は本が解けるとよろこんで満足するがひとは本が解けると仇になる」という。というのは人間は欠点が多いので仇になるが、神は全能を賛美されて喜ぶという意味である。結局本解は神を賛美、和悦、降臨させる呪力を持つ神話でありそういう資料は数多くある。

(「韓国民俗学概説、巫歌」、李杜鉉、張籌根、李奎、崔吉城)

CHILSOUNGBONFURI
GANGNAMCHONJAGUKI
OKOLMIYOUNGSANSANG
BONGESONGSUBUGUN
JANGSIBUINISANUNDI
JASIKIOPSOSOGUNSI
MHAYAJANGGWANGDUE
SUKSOKGURODERULDA

KUGOCHILOULCHILSOU
KBAMEJETSANGILGOP
GEBYOUNGPUNGILGOPG
ECHOSOKILGOPGEBAP
ILGOPGURUTJESUILGO
PGECHANMULILGOPGE
POYUKILGOPGELULOLY
OSOJYOUNGSONGEULD
AHEKIDOHANIWONGSO
NGKWOAMOKSOUNGGUN
GWOAGESOUNGGUNGWO
MYOUNGSOUNGGUNGWO
ABOKSOUNGGWOAYOUNS
OUNGGUNIOUKWHANGE
SONERYOWASOEUNGGAM
HASIGO「NOIJYOUNGSO
NGLJIGUKHANIWURIGA
MODUINGANIBOKEULJO
NJIHEJUMA」

中略

KUNTALEUNDONGWONGH
ALMANGIDEGODULZETA
LEUNKWANGCHOUNGHAL
MANGIDEGOSEZETALEU
NMABANGHALMANGNEZE
TALEUNGUNGGAHALMAN
GDASOTZETALEUNSA
OUNGHALMANYOSOTZET
ALEUNGISENGHALMANG
ILGOPZEHALMANGEUNG
WANWONHALMANGIDEGO
OMONGEUNBOKGWOAMY
UNGEULZUNUNJONDAPB
UGUNIDEOTSUNIINGAN
IJYOUNGSONGEULDULI
MYONBUUHAGEDENDA

七星本解

江南天子国の玉骨
彌靈山上峰に、
宋氏夫君張氏夫人住みたるが、
子息無くして心配し、
醬缸臺の後に熟石もて臺を築き、
七月七夕の夜に
祭床7つ、屏風7つ、草席7枚、飯7器、
祭需7器、冷水7器、脯肉7器を捧げて、
精誠を盡して祈祷すれば
元星君と木星君と啓星君と
命星君と福星君と燕星君が
玉皇より降り来りて、
應感し給ひ「汝の精誠至極なれば
我らが皆人間の福を享有せいめんと」
中略
長女は東園嫗となり次女は官廳嫗となり、
3女は馬房嫗、4女は宮家嫗、5女は使令嫗、
6女は妓生嫗、7女は果園嫗となし、
母は福と命を與ふる田畝府君となりて
人間祈りをなせば裕福になるなり。
（「朝鮮巫俗の研究上」、赤松城、秋葉隆）

七星 GUT「扶餘」

省略、結婚をしてから何ヵ月が過ぎても妊娠の兆しがなかった。七星は3代の独り子であり、梅花婦人は独り娘であるから心配が多かった。「わが大君は祖先の墓に祈って息子ができたそうです。わたしたちも七星堂に祈ってみましょう」。梅花婦人の勧誘にしたがって七星堂に子供を祈ってみることにした。七月七夕に祭祀をすることにした。白米も7杓を捧げ、大きい蠟燭も7つを捧げ、紙も7斤を捧げた。服も7枚を捧げ、お金も7ニャンを捧げた。思った通り祈った3ヵ月10日ぶりに妊娠の兆しがあった。1月、2月の間、血を集めて3月に悪阻があり、4ヵ月ぶりに4肢をつくって10ヵ月になった、ある日、出産の気味があって、すべての準備をして出産してみたら息子が、1、2、3、4、5、6、7、

みんなで7人双子であった。省略

（「韓国の巫俗神話、寿命長寿神話」、金泰坤）

この神話は扶餘地域で財物に運があるように仏に祈る「祝願 GUT」の中の「七星 GUT」で歌われる巫歌である。ここでは子供を生ませてくれるように、また子供の寿命が長くなるように祈ることである。

七星 GUT「淳昌地域」

省略 七星堂に祈る時、3月10日百日山斎七星堂に祈る時に、米に白米も17杓、服も17枚、餅を作る器も17、火も17つをつけて、このように祈ってこの子孫を祈って生みましょう。名山堂に七星堂に祈って、名山に祈って子孫を祈って生む時、焼紙も17件、ご飯も17つを捧げ、我らも祈ってあなたも祈る時、我らは龍王祭をなさい、あなたは7星祭もなさい、省略 家の中に福をくれ、男女子孫たち命くれ、寿命長寿助けてくださり、運と福と祿を支えてくれ、財物の損害を防いでください。省略

（「韓国巫歌集2」、淳昌地域巫歌、金泰坤）

以上のことが韓国の巫歌に見える七夕歌の特性であるが、そのほとんどは祈願することに中心をおいており、その行事的な性格としては農業に関係があることが多かった。要するに水と星に関する行事である。これは日本でも同じことが言える。もともと中国のものであると言われる乞巧奠は日本にもあるし、韓国にもある。ということは漢字が日本に入って来たのと同じように韓国に一旦定着し、日本に入って来たと思いたい。それがいつごろ入って来たかと言えば百済が滅亡した660年以後になると思う。この年には百済の王族、知識をもっていた貴族たちがどっと入って来たと思う。この渡来人たちによって七夕の行事は成立され、万葉集の七夕歌に影響を与えたのではないと思われる。その百済の渡来人に関しては服部喜美子氏が詳しいのでそれをちょっと見ることにする。

4、渡来人と七夕

古今集羈旅部に次のような詞書と歌がある。
これたかのみこのともに、狩りにまかりける
時に、天の川といふ所の川のほとりにおりい
て、酒などのみけるついでに、みこのいひけ
らく、狩して天の河原にいたるといふ心をよ
みてさかづきはさせ、といひければよめる
かりくらし七夕つめにやどからむ天のかはら
に我は来にけり

在原業平朝臣

この歌は伊勢物語にも見える。ここに登場する、惟喬親王の別業「渚院」に近い天の川は、現在天野川と名付けられて、枚方市、交野市などを流れて淀川に入る川である。その流域には星丘、星田、星尾など星にかかわる地名が多く散在し、かささぎ橋などの名さえ見られる。また、流域一帯には、機物神社（現枚方市倉治）という機織神社ともよばれる天棚機比売大神を祭る社もあり、星田神社（寝屋川市星田）の末社小松神社（別称高良神社）の御神体になっている岩を「織り女石」と呼び、中山観音跡（現枚方市茄子作）に残る岩を「牽牛石」と言い伝えるなど、天の川流域の七夕にかかわる地名や遺跡は際立った存在である。ことに、機物神社では「河内名所図絵」によれば、かつては毎年陰暦七月七日の例祭に、童男1人を選んで祭主に定め、けがれを禁じ、村人達は天の川に出て髪や目を清めたという。その後井戸水によってなされるようになり、近年は陽暦の七月七日、現今の民間の七夕行事と似た形の祭りに変わっているという。

これらの天の川流域一帯に残る七夕伝説に関わる遺跡は、天の川なる名に寄せた後世の附会に過ぎぬと見てしまえばそれまでであるが、それらの淵源は古く、この地域一帯に勢力をもった渡来系の人々——特に百済系一族の習俗行事

に関わって生まれたものである可能性がある。現天野川の流れ近くに、百済寺跡と百済王神社（枚方市中宮）が存在する。当地方に領土を与えられた百済王敬福の館址に建立されたと言われる特別史跡百済寺跡と隣接して、百済王神社がなお存続している。百済王敬福は知られるとおり、天平勝宝年間にかの大仏建立に際して不足した黄金を、陸奥守として在任していた彼地から聖武天皇に献上した人物である。彼はその功によって、従五位上から一飛びに従三位に昇進、河内守に封ぜられた。聖武天皇の格別の寵遇を受け、「賞賜優遇なり」と「続日本紀」に特記せられている。河内守に封ぜられた彼は、枚方の当地に館を建て、以後この地を一族の居住地として栄え、百済寺を建立したという。敬福一族の住んだこの地は、もともと渡来系の重要人物王辰尔の居住地の跡という。

百済寺は発掘の古瓦に白鳳期にものが見られ、そのころからこの地に寺が建てられていたことを語る。敬福の一族は、「百済王」の呼称を持統朝に許されており、天武天皇の殯宮に誅を奉ることを許された郎虞の子である。天智朝に渡来した百済本国の王善光の直系である。日本は、持統朝には新羅とも親近関係を持ったが、国内において、「百済王」の呼称を許されたこの一族は、渡来系人達のなかでも、最も宮廷に重用された名家として、代々文化の指導者となり、武家としても優れた将軍として活躍したことが知られている。彼らは難波に住し、天の川流域の地に移ったのは、敬福の時（天平勝宝年間）とはいえ、この一帯には、早くからやはり百済系の名氏族が、勢力を持って集まり住んでいたことが知られる。加えて天の川の流域には、「私市」の名に残る皇后領が敏達天皇代から定められていた。王辰尔は敏達天皇に厚く賞賛せられている人物で、このあたりにも渡来系族との結び付きの、幾重にも深い地域であることが知られると言えよう。

そして皇室とも古くから関わりの深い美田地帯を控えていた模様も推察せられる。持統天皇の名「うのささら」と深い関係の感じられる讃良郡に接し、その辺りには新羅王子後裔と伝えられる宇野連一族が居住していた。讃良郡の名は今は残らないが、讃良川の名に残り、讃良寺址は跡形もないが、その美しい本尊観音像は近くの現大正寺に秘蔵せられていた。讃良郡一帯の歴史は古く、郡院址と推定せられている岡山の地には、忍陵古墳（4、5世紀か）等古墳遺跡が多い。

かくして、この地一帯に百済一族が最も繁栄した時期は、聖武朝から平安初期にかけてではあったが、それより古く代々渡来人の百済系一族が住みつき、人々は母国の年中行事を行い日本人たちの目をひいたことと思われる。ことに七夕の祭りのみそぎや供物が天の川水辺りで行われたことは想像に難くない。奈良朝末期、藤原継縄の別業が交野の地に建てられ、代々の行幸はそこを行宮とした。そこでは百済王族らの百済樂が奏上されたと記されている。

奈良朝から平安初期にかけて、光仁、桓武両帝をはじめとして宮廷要人の当地への来訪が頻繁に行われた。ことに、桓武天皇はその母や妃の幾人かが渡来系の女性であったので（妃の何人かが百済王一族である）、数度にわたって百済王の館に行幸している。このような歴史が当地と代々の皇室との結びつきを強め、禁野、渚院などの史跡を残したのである。宮廷とゆかりの深い土地としての歴史が以後連続した中で、宮廷に交ったこの地の渡来人たちが代々繁栄した。故に先進国の芸能、習俗が伝えられ七夕の床しく美しい行事も途絶えることなく続いて、今それに関わる地名や遺跡の数々を残すことになったのであろう。

（服部喜美子「万葉集七夕歌小考」、『万葉集研究第十集』）

七夕のいわゆる「星合」を主題としたものを除き、星を歌った作が極めて乏しいということは、上代日本人の生活が星と関連をもつこと少なく、民族の星への関心の希薄であったことの反映で、その源泉は神話の世界にまで遡る。すなわち、日本の古典神話には、星が登場することは極めて稀で、わずかに「天津甕星」「天香香背男」という星の神が、高天原にあって天つ神に最後まで反逆した悪神として現れるだけで、それはその名に「神」や「命」の称を帯びるに至らない多分にデーモン的な悪霊的存在に過ぎず、星としての形象も具体性に乏しい。これは星や星座の形象性に富むアトラスの7人の娘プレイアデス（昴の星座）やオーリーオン（オリオン星座）などの星神の群像に採られているギリシャ神話の世界とは甚だしく相違し、またはやくも周初の頃に28宿の星宿図を創案した中国の天文暦学の知識からも隔絶した世界を示していて、日本民族本来の地上的性格を物語る事実であると言ってよい。

然るに、唐制を範とした日本古代国家の成立と貴族政治の進展に伴い、帰化人らによって持ち運ばれた先進中国文化の波は、急速に貴族社会を蔽い、これを洗うに至った。かくして天体についての認識に乏しく、星座を観察することもなかった上代日本人の目を、ほとんど突如として、幾世代にもわたった天体の観察と暦法の知識の集積として創出された中国の天文図が射ることとなったと考えられる。それは、大化の改新（645）、壬申の乱（672）の激動期を経て古代国家の基礎が確立された、いわゆる白鳳期の頃のことで、この頃になると中国の天文暦学の知識ばかりではなく、それを直接視覚に訴える星宿図も招来され、さらにはその天上的な永遠性、荘厳制をもって貴人の墳墓の天井を装飾するに至ったのであって、それは古代貴族の星に対する認識に大きな変革をもたらさずには置かなかったと想像される。このことを文字の上

だけではなく、視覚的な現実としてわれわれの前に実証してみせたのは、言うまでもなく、昭和47年3月21日に発見されて人々の耳目を驚かした、高松塚古墳の装飾壁画の出現であった。

この古墳は古墳時代の終末期、すなわち7世紀末から8世紀初頭の間に築造されたものというのが通説であって、それはまさしく万葉の最盛期、柿本人麻呂の活躍した万葉時代の第2期に当たる。その壁画は青竜、白虎、玄武（朱雀を欠く）の4神図と、日月星辰の天象図、及び男女の人物象によって構成されている。そしてこの構図は「4神図や天象図のもつ象徴的墓鎮的な性格と、死者に随伴する男女群像によって現世の生活を死後の世界に延長させようとする性格とが、1つの空間内に組合わされ、しかもこの二重の機能が、相称的な構成法の中に巧みに生かされている」ものであると説明されているが、この壁画では、「4神、日月を壁画の中心部に、星辰を「天の原ふりさけ見」る天体そのままに天井一面に配し、「壁画本来の意図としてはそれらが主題であり、人物像はむしろ副題ではなかったか」と推定されている。これは古代貴族の意識における星辰観の変革にとどまらず、地下から天上への他界観の大きな変革でもあったと考えられる。とすれば、星に対する関心と知識の著しく高まった天武朝の頃は、七夕説話が受容されるのに極めてふさわしい時期であったと言うべきである。

（「万葉集研究第四集、人麻呂歌集七夕歌の位相」、大久保正）

宮中の行事や宴に先立って、すでに天武朝から風流文雅を誇る新風に敏感な皇族や貴族の宅でも、渡来人たちの習俗に直接の範を得て、七夕の祭りに因む行事と宴が行われ、そうした場で、若い日の人麻呂を中心とする七夕歌が生み出されていったのであろう。天の川流域に限って見たところだけでも、渡来人達（新羅、百濟）

の勢力が根を張り、宮廷と強く結びついた点で著しいものの見られるのは、天武、持統朝である。天武、持統朝には、各地の渡来人達の厚遇が目立った時期であったと考えられる。そして彼らの文化が、尊重され取り入れられた時期でもあったであろう。例えば、近江琵琶湖東岸の古くからの渡来人の居住した地として知られる辺りに近く、彦根付近にも「天の川」と今もよばれる川が流れ、そこでは近年まで七夕の行事が川辺で行われ、乞巧奠の古式にのっとった様々の供物を灯籠とともにその川に流す風習が復活していたという。同様の水辺の七夕の行事習俗は、各地の渡来人集団によって行われていたのであろう。

（服部喜美子「万葉集七夕歌小考」、『万葉集研究第十集』）

天武朝には、正月1日はもとより、7日、16日の肆宴、大射などの行事の定着が明らかに見られるほか、9月9日の宴の記録も見え、またのちに七夕の詩宴と同時に行われるようになった相撲の記録も見える。七夕の詩宴が、左大臣邸、太宰市邸などで行われた記録があるように、これらの「大陸渡来の節会の宴は、単に宮廷のみにとどまらず、帰化氏族とかかわりの深い皇子たちや貴族、豪族たちの許でむしろ早く行われた可能性が強い」のである。

（大久保 正『日本文学史上代』）

結 論

中国では牽牛と織女との会合の日と考えられていた七月七日の七夕の伝説は後漢時代からすでに見ることができた。牽牛、織女の物語は現在も中国各地に広く行われている。このような七夕の伝説は基本的に白鳥処女説話と結び付いたものとして考えることができた。

韓国では昔の人たちも星に関心があったし、

「七夕」について

七夕の伝説を味わったと考えられる。高句麗の大安里一号墳壁画では天漢を表す波が描いてあったし、同じく高句麗に属する永樂八年（四〇九年）の徳興里壁画墓では牽牛と織女の絵が見えた。韓国の年中行事を通じて七夕にまつわる伝説をちょっとうかがうと、それは GUT というものからうかがうことができた。この行事は

地方によって多少ちがうが、そのほとんどが祈る、願う、乞うことであった。日本の乞巧奠というものも韓国にすでにあったわけである。日本では、主に文化をもって来た渡来人たちが中心になってこの期間に行ったものがだんだん広がって、今の七夕ができたのではないかと思われる。

参考文献

- (1) 赤松城、秋葉隆「七星本解」『韓国巫俗の研究、上』大阪屋号書店、1937 年、519 ページ
- (2) 新城新蔵、「七夕物語」『宇宙大観』26 ページ
- (3) 李社鉉、張壽根、李光奎、崔吉城「巫歌」『韓国民俗学概説』学生社、1977 年 307 ページ
- (4) 出石誠彦「牽牛織女説話の考察」『支那神話伝説の研究』中央公論社、111 ページ
- (5) 折口信夫「水の女」、古代研究民族学編『折口信夫全集、二巻』中央公論社、1927 年、429 ページ
- (6) 大久間喜一郎「七夕説話伝承考」『古代文学の伝統』笠間書院、1978 年、283 ページ
- (7) 大久保正「人麻呂歌集七夕歌の位相」『万葉集研究四集』、「柿本人麻呂の出現（第二期）」『日本文学史上代』塙書房、1975 年、169 ページ
- (8) 金泰坤「寿命長寿神話」『韓国の巫俗神話』、「淳昌地域巫歌」(『韓国巫歌集二』) 1985 年、264 ページ
- (9) 倉林正次「七月七日節」『饗宴の研究、文学編』、桜楓社、1969 年、144 ページ「七夕歌とその儀礼的背景」『饗宴の研究、文学編』桜楓社、1969 年、198 ページ
- (10) 崔吉城『韓国の祭りと巫俗』雪雪出版社
- (11) 服部喜美子「万葉集七夕歌小考」『万葉集研究第十集』塙書房、1981 年、263 ページ
- (12) 依田千百子「朝鮮文化の二重性に関する一考察」『朝鮮民俗文化の研究』瑠璃書房、1985 年 281 ページ
- (13) 『韓国民俗総合調査報告書 忠清北道編』韓国文化人類学会
- (14) 『韓国民俗総合調査報告書 慶尚北道編』文化公報部、文化財管理局、1980 年、590 ページ
- (15) 『韓国民俗総合調査報告書 全羅北道編』文化公報部、文化財管理局、1971 年、488 ページ
- (16) 『韓国民俗大辞典』韓国民俗辞典編纂委員会、民族文化社、1991 年、1413 ページ
- (17) 『民俗誌』文化公報担当官室、1987 年、250 ページ